

今日は復活前主日です。イエス様の復活される1週間前ということで、今週はいろんなことが記念されます。その流れを先ず頭に入れましょう。そして、今日の福音書から、ルカによる福音書の特色を学びたいと思います。

イエス様が復活する前の一週間は、大変目まぐるしく展開してゆきます。

日曜日はイエス様がエルサレムの町にロバに乗って入城されます。私たちが今日、シュロの枝を手にとって礼拝したのは、人々が大歓迎でイエス様を迎えた時のことを思い出し、私たちもイエス様を心にお迎えする準備をしようとして、最初の聖歌を歌うわけです。

月曜日には何があったでしょうか？月曜日は、宮きよめです。エルサレムの神殿は、過ぎ越しの祭りを祝うために大勢の参拝者でごったがえしていました。そこでは、鳩を売る人や両替人が商売をしていたのですが、イエス様はその様子を見て、「祈りの家を強盗の巣にしている。」と言って、大暴れしたのが月曜日でした。

火曜日は、エルサレムの神殿で議論をしていました。先週の福音書である「ぶどう園と農夫」の話とか、皇帝に税金を納めるのは正しいことかどうか、などの議論を律法学者たちと行っていたのです。

水曜日は、イエス様はエルサレムの町には入らず、ベタニアというオリブ山の東側にある町のラザロ、マルタとマリアの三兄弟の家で過ごしました。この時、マリアがイエス様の体に高価なナルドの香油を塗ったことは有名です。ただし、香油を塗ったのが頭だったか足だったかは、福音書によって違いますし、ルカによる福音書ではそのことは書かれていません。

それから木曜日になります。木曜日は、エルサレムに入り、弟子たちの足を洗ったり、最後の晩餐で聖餐式を制定して、そのあとゲッセマネの園で逮捕される、という、受難物語が始まったところです。

そして、金曜日になります。裁判から十字架に掛けられて殺され、遺体が墓に納められるまでの、苦難の一日が金曜日に起こったのです。

そのあと、土曜日にはイエス様は墓の中で過ごされましたが、日曜日の朝、イエス様の墓は空っぽになっていた、というのが、この一週間の出来事です。

それで、今日は先ほど読んだイエス様の受難の出来事から、学ぶことにします。イエス様の受難については、4つの福音書すべてに書かれているのですが、特にルカによる福音書を読んでも、他にはない特色がいくつかあります。それは苦しみの中でも、他人への配慮の言葉が出てくるのが特色だと私は思っています。特に今日注目していただきたいのは、23章34節です。この箇所は、特別な括弧〔 〕で囲まれています。

〔そのとき、イエスは言われた、「父よ、彼らお赦してください。自分が何をしているのか知らないのです。』〕

これは、どうして、特別な括弧がついているのか、皆さんはご存知ですか。

聖書の最初の「凡例」(6)

「新約聖書においては、後代の加筆と見られているが年代的に古く重要である箇所を示す。」と説明されています。最初はなかったけど、重要なものとして加えられた、ということです。

この言葉をイエス様が本当に語られたか、というと、それは自信がないけれど、教会が始まった頃の人々にはとても大切な言葉だった、ということでしょう。

「父よ、彼らお赦してください。自分が何をしているのか知らないのです。」

これは、おそらく、イエス様の体が十字架に釘で打ち付けられる時か、あるいはイエス様の着ていた服をくじ引きしている時に言われたことでしょう。

体を痛めつけられて、恨み言でも言いたいところでしょう。マタイやマルコによる福音書では、「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか。」という詩編の言葉が書き記されています。イエス様の心境を考えると、実際そんな言葉を言われたのではないかと私は考えるのですが、このルカによる福音書に描かれたイエス様は、ご自分がひどい目に合わされているのに、目の前の自分を殺そうとしている人々のために祈るのです。

イエス様はかつて、『敵を愛し、あなたがたを憎む者に親切にしてください。』(ルカ6:27)ということをお弟子たちに語られたことがありましたが、ご自身の生涯の最後の時に、その模範を示されたのです。

そして、この福音書の著者であるルカは、続いて、使徒言行録で、イエス様にならって生きた、キリスト教の最初の殉教者であるステファノの最期を描くのに、同じような言葉を使っています。

ステファノの殉教のことは、皆さんよくご存知と思いますが、処刑の方法は十字架ではありません。十字架刑は、ローマ帝国が、帝国に反旗を翻した政治犯に対して行なう死刑方法でした。しかし、ステファノの場合はローマ帝国とは関係ありません。彼はユダヤ教の法律に逆らって、イエス様を神様であると主張し、神様を冒瀆した、ということで、石打の刑で死刑になったのです。

ステファノは死ぬ直前に三つの言葉を語りました。ちょっとステファノの殉教の場面を見てみましょう。

◆ステファノの殉教

『54:人々はこれを聞いて激しく怒り、ステファノに向かって歯ぎしりした。55:ステファノは聖霊に満たされ、天を見つめ、神の栄光と神の右に立っておられるイエスとを見て、56:「天が開いて、人の子が神の右に立っておられるのが見える」と言った。

57:人々は大声で叫びながら耳を手でふさぎ、ステファノ目がけて一斉に襲いかかり、58:都の外に引きずり出して石を投げ始めた。証人たちは、自分の着ている物をサウロという若者の足もとに置いた。59:人々が石を投げつけている間、ステファノは主に呼びかけて、「主イエスよ、わたしの霊をお受けください」と言った。60:それから、ひざまずいて、「主よ、この罪を彼らに負わせないでください」と大声で叫んだ。ステファノはこう言って、眠りについた。』

『人の子が神の右に立っておられるのが見える』というのは、ニケヤ信経や使徒信経の中のイエス様を表す言葉がここに出てきています。しかも、座っているのではなく、立っていると語っているのは、イエス様が今、働いておられることを表す表現でしょう。

そのあと『主イエスよ、わたしの霊をお受けください』と言われたのは、今日の福音書で、最後にイエス様が言われた、『父よ、わたしの霊を御手にゆだねます。』という言葉に倣ったものでしょう。ただ、イエス様は『ゆだねる』という風に、対等かご自分が高い地位にあることを表しているのに対して、ステファノの『お受けください』は、自分がイエス様より低い立場であることを表しています。

そして、何よりもステファノの素晴らしさを表す言葉が『主よ、この罪を彼らに負わせないでください』です。イエス様の言われた『父よ、彼らお赦してください。自分が何をしているのか知らないのです』に対応しています。本当に、イエス様やステファノがこのとおりを言ったかどうかはわかりませんが、クリスチャン迫害の時代に、相手のためにとりなしの祈りをしている初代教会の信仰を表したものでしょう。そして、クリスチャンとは、イエス様の生き方や死に方に倣っていく者だ、という主張がはっきりと示されているように思います。

3年前の2月に始まった、ロシアのウクライナ侵攻の出来事は、「敵を愛しなさい」と言うのがむなしさを感じるのですが、自分の立場を守るために、相手を殺してしまうこのような行動は、納得のいくものではありません。

自分が大切な人間であるのと同様に、相手も同じ大切な人間だということを私たちは考えなければなりません。

ルカによる福音書に出て来る「敵を愛しなさい」という単元の最後には有名な黄金律が書かれています。

◆敵を愛しなさい

6:27 「しかし、わたしの言葉を聞いているあなたがたに言う。敵を愛し、あなたがたを憎む者に親切にいなさい。 6:28 悪口を言う者に祝福を祈り、あなたがたを侮辱する者のために祈りなさい。

6:29 あなたの頬を打つ者には、もう一方の頬をも向けなさい。上着を奪い取る者には、下着をも拒んではならない。 6:30 求める者には、だれにでも与えなさい。あなたの持ち物を奪う者から取り返そうとしてはならない。

6:31 人にしてもらいたいと思うことを、人にもしなさい。

私たちは相手の痛みを感じとる感性を養い、自分の存在が人々に良い影響を与える者であることを感じたい。

何年か前の今年の年賀状に書いたのですが、『古代エジプトに伝わるお話だが、死後の世界、天国への門の前で死者は二つの質問を受けるとのことらしい。①自分の人生に、喜びを見出せたか？②他人の人生に、喜びを与えられたか』

他人に喜びを与えられる人間でありたいと思うのです。